860
44

女院御出家
小原入御
小原御幸
六道
女院御往生

国立国会図書館　タイトル『前田流節附平家物語』　請求記号 860-44
ガラス使用

口訳
860-44

女院御出家

建礼門院ハ東山の麓。吉田の辺なる
所に住給ふ。中納言の法印慶
賢と云ける人ぞ。法師の信也ける。
ひらして年ハ六十ばかり。庭ハ草深
軒ハ長下草ハ茂るまゝ。簾絶間露

風なまるべうもなし。中、紅葉色々ぶり人去。
主も歩む。人もなく。月も夜々。差入芸。
海て明け。雲色なし。昔も玉の臺へ
人がゝ。錦の帳。纏りて。明し暮さ
絵ひしが。今ゝもこゝ在人少色昭前
果ゝ。淺樓氣なる朽場。入せ淋者。

三

御心の中。推量らまて。蓬ゝ魚れ
陸。上るが。如く。有の巣。雛ゝ
如し。さる侍ゝ。憂かゝ。波の上。船
の中れ。御住居。今ハ高ゝ。見ゝ
有。蒼波路を。思ゝ西海千里の。
雲。寄て。白屋若深。東山庭の。

月ゝ落悲しき色を討りなし（読ノ一）
女院ゝ。大治元年五月朔日の日。御髪
落ゝ。遂ひ給ひ。御戒の師ゝ。長樂寺
の阿證房の上人。御誓ゝ。笑し。
御布施ゝ。先帝の御直衣なり。今
八の時ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。
移香もいまゝ尽せず。御かゝみ
ぜんゝ。西国ゝ。遠ゝ。都ゝ。
涙ひたすらかたぶかせ。世ゝ。御身
を放しゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。御布
施ゝ成ゝ。ゝ。物ゝ。故。且ゝ。御
菩提の御ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。

二人共を縫て。仏に奉る。
墨染の袖と。顔を押隠す。法々御所とぞ。
まかりもらるる。仏の御衣とぞ。幡ふ縫
て。長楽寺の。仏前に。急いで。参らせ。
少し。女院を十五まで。女御の宣旨
蒙らせ給ひ。十六まで。后妃の位ふ備り。

君王の傍に侍り給ひ。朝政を
進め。花を花と専らし。二十二で
皇子御誕生まして。皇太子立。位る
即せ給ひしかば。院号蒙らせ給ひて。建
礼門院とぞ申る。入道相国の御娘なる
天下の國母まして。世の重

とる事鈍くなり。今年は二十九歳。
成せまじきなり。桃李の御粧ひもぢ
濃く。美容の御形の。つまぐ書へさま
沿り行く。翡翠の御簪。著のても何に
かハせさま沿ものゝ。遂ぬ御様成
語さま。絶てぎり。沿せ成いさひ。寒の方よ。

入せ沿へ。芸。御殿ハ更まで盡せず。人々今
朝ゝ海ゝ沿しゝ様。先帝二位
殿の御面影。忘しゝ御身ゝ添てめ
ゝ
なくゝ世ゝ。ゝ。思ゝ。ゝ。ゝ露
の御命。何に。今ゝ
ゝ。ゝ。ゝ。

ナアル　重　四ツアノ、一　三ナ　元ア
節句す。五月の短夜なれば、寝ぬ間の夢とぞ。
ナ元　一声エ　四ツアノ　元ア　アア　三ツナノ
移りつる自ら、ふ内ごろもぞ昔の
元ア　引　ア　元アナ　四ア　ナ四ナ下ハ一　アア
事成ぞ。夢よりなほ。御殿を。麓を背を
元ア　元ニ声　ハ一　ハ一　ハ一　ハ一　ハ一
内。殘の燈の影。幽なる。淋夜。窓ふ暗さ。
アノ元ナ　ナ三ツアア　三ツハ一　ナアノ　アア　ナアノ
面の音ぞ。淋しかりける。上湯人が。上湯
元ア　元ア　元ア　スノノナアア四
宮に。閉らまたる事を。悲しく。思ふ。

元ノ　ナ　ハ折ノ　ハ　元ル　ハ
うぐひす。一ハ。昔と思ふ端とぞ。
ナ　ハ　ハ　ハ　ハ　ハ　ハ
て。故の主の移し。植置ける
ハナ　ナト　ナ引ス　ハ　ハ　ハ　ハ　ハ
盧橘の。風懷布。彩
ノ　ノ　ノ　ノ　ノ　ノ　ノ　ノ
山郭公の。二声三声。音信て通る
ノ　ノ　ノ　ノ　ノ　ノ　ノ　ノ
花ハ。女院故事なれ。思ひ出で。御
元ル　上歌　ナアアアアアアアル　元ル
月の蓋。彩。遊さ。時鳥花橘の

奇成い事ども。鳴り八昔の人や意しれ。
女房達ら。二位殿越前の三位の上
様ら。左右、獲り水の底ら泳ぎ
り孫ば。武士のあらまたきに捕れ
て。回里へ泳ぐ。老ゆるも若きも或ハ
様ら皆或ら形ら寝て。まもなく死ぬる

有様云ふて。思もかけぬ若の底。若の
ちざまもて。明し暮し給ひる。
住居し宿ら皆。嘆と成て上りる
ちかば。寄ら跡耳。沙弥深さ世
過ぐ成ば。只別し友の同者ども
ゆし。伝家ら帰て。七世の孫ふ遂

為ても、新やゝ覚へて、哀なれ、

七月九日の日は大地震る。第地

初めの時は、ゆるぎ、ゆるぎて

いと怪しく、海も傾き破て

海は、波なし。

中

小糸入道

緑衣の監使、官門を守るだに、

心の終る。荒き籠を、滋き世を

思も、落けくるとも、如顔ぶつしか

世の声、悲しき、ものなりぶ。

浦も断長くなりぬ。寝覚勝

三ツ　二ツ　ア入　四元　ア入初

すべ。ゆしべ。蕃さを。結ぶ。盡せぬ。河面

ひ。秋の。蕃さ入ぶ。流ぶ。いつ。忍ひ

難ぶや。思ふ。ふし。少。行事も。皆。暮り

果ぶる。うき。世。ふし。自。情とかも

ぶ。人。ふ。苦。ぶ。身。ぶ。皆。ぶ。ふ

果ぶ。誰。皆。ぶ。ふ。見。ぶ。ふ

芸七條の修理大夫信隆卿の北方。

冷泉の大納言隆房卿の北方。忍

ひ常を訪ひ申さ。女院。兼。

ぶの。人。芸の。蕃。ふ。て。ぶ。ぶ。

思ふ。ふ。蕃。ふ。ふ。て。河。衣の。御。秋。

餞る。河。涙。塞。教。ふ。ぶ。ぶ。ぶ。ぶ。ぶ。

国立国会図書館　タイトル『前田流節附平家物語』　請求記号 860-44
ガラス使用

行き女房達も皆袖を濡らし給へり
此御住居も都程近くて、玉鉾の道
行き人の人目も絶えぬ。寄の御命は
風と消えぬ。程なく憂事同様濡れぬこの
奥の奥にも入るものやうに思ひ給へ
ども、さすがに世に捨てられぬ。或女
房の右田に参りて大原の奥
寂光院と申す所に世を隔て給へ
り。女院山里住の物の淋しき事
有難くも哀世の憂さに任せぬなる
物とは、思ひ入れし事なれ
ども御輿かきの陰の北方

より御波汰有まもなく文治元年
長月の末より彼叡光院に入せ給し
内しまる修道四方の梢の色々なるを御
覧し過ぐる夕修学僧山法師なれば
日も已に暮ぬ野寺の撞鐘入
相れ音せごとく谷の木葉の落るげに最
御袖濡増り嵐烈く木の葉相ハし
室殿曇り果て雨降て鹿の音
幽に音信て出れ悲も絶々なるかく
丹取集なる御心細さ哀へ
方もなし浦伝ひ波ひせしかども
流石かくらせ物とも思こそ

悲しき事ども苦しき冷泉の所
なれば住まる御方やゆゑ高き名
作ぶ庭北萩京家の籠の菊九
月もくれぬ移らふ多くと御覧人にも活
身のとこやゆ思しめ備仏の御前
京さも移ひ天子重一門亡魂

十三

成等正覚出離生死頓證菩提と
祈り生しめる御心の中もと先帝二
位殿の御面影忘しき御身ゆ流てか
なら世ま者ども見ま事
佐殿光院の信ゆ方丈なる御庵室
とゑび一間とて御寝所定一間とは

国立国会図書館　タイトル『前田流節附平家物語』　請求記号 860-44
ガラス使用

仏所にまゐらひ夜朝々の御勤長
時不断の御念仏とこたる事なくて
月晨送をくりもり新て神々月中
のみ白れ給ふに散布樹の葉と
物騒敷しく少へ女院せと獣
所より物者れ同ぶ様にはとんやあぶ

ぶく物ものいハぬ悲しき事ハ
らるに男鹿の通るあてもの良
有て女院さていう事ハ仏大細云
異侍の局洞と押て歌若根妻ハ淮
かハ同ぶ樹の葉なくハ鹿の涙
なるあと口女院此歌と哀に思ふ汐

唐家の窓の小障子に越し留めて
花とし咲ける新御所の
御所の中も思ひ
やらるる夏の夜の
三重
月もいとどうらめしく
かたぶく月に
水とバ八功德
水と見なす
の花風吹て散

安々有涯の秋の月
雲なく伴なひて
あし照湯殿の花
風吹て薫り散し長秋宮の月
清くして夕べの雲
苔の玉楼金殿の錦の褥と敷妙
少清住所也しかば今の紫宸殿

苔の庵篠所の袂も濡れまさり

小原御幸

斯りし程に法皇は文治二年の春比
比建礼門院の大原の閑居に御住居
御覧せんとの事ありしかば三月
弥生の程に風烈しふ篠・竹もいまだ
尽すに峯の白雪消残らで花ぼらも

折ふし春日参来りて北条もまし
かば法皇度々筆を大原の奥御幸なり
悲の御筆也其後信西の人々再々御
大寺花山院右衛門督
殿上人八人北面武士多数
通りの御車に彼清原の頼業父が
[illegible]

補陀樂寺小野の皇太后宮北洞院敵
[illegible]遠山まとる白雲散ふし花の儀也
青葉繁り春の名残を惜
北斗卯月廿日餘り東北に夏
の茂らぬ末と分き入せ給ふ御

幸なりしく御覧し則ち言葉人
跡絞へる程も是部ちもて河の
西の山は霞より一字北洲堂
光也回り遠りなる泉水
様の所なり覧仏もてる翁不動の香
とたらる扉落てる月常住の燭とかぐ
芝ケ様の所とや中食まく庭の若草茂り
笛音柳糸と乱りつ池のうきくさ浪
よ澤ひ鶯と曝せかと河金海辛る中島
の松よ多まる藤浪の裏紫よ咲る色
青葉交の遅桜初花へ孫ひ
岸の数々咲乱八重雲の絶間より

山郭公の一声も君の御徳なるを
法皇先と敷給へて那も通さぬ
池水汀の柳散布て波の花も盛
なり弟達四方に流る紅葉は紅の落
葉水の音さへ故び由を示す緑
蘿の垣翠黛の山絵も書筆も及び
かたし 叡女院の御庵室と御覧ぜ
軒ちら葛あさうなひかりと惹交の
菅草 折瓢 簞 屢空し 草顔淵が
巷に溢し 藜 蓬 深鎖 雨原憲が
樞も濕 芸 謂 杉の 戸目も 器
て時雨も 雪も 露も 洩 月 彩に

国立国会図書館　タイトル『前田流節附平家物語』　請求記号 860-44
ガラス使用

ひらそして花多へし芸人(ごうもの)もあり
後ハ山前ハ壁迫イ篠小篠ヨ風噪
世ヨ立忍身ハ想ふくく憂節滋竹柱
都の言傳ふ間遠ヨ繕ふ藩架籬
僅ヨ車同物ふ山領ヨ木作猿八
声賤ヶ蒸の斧ハ音等ヶ音信ふ
でふ薜の蔦防己来人柿ふ所也法皇
人ヤふる人ヤあると仰ふ御庵ヤ者
もたし自ふて老ハ後(ゴ)尼一人
乗ふる女院ふ何りへ御車ヨ号ヤと
作ハ此上の山へ華嶋ヨ入ヤ作
こヤヨ居ふ世ハ御暫ヶ云ハ

左様の御夏なごに仕へ奉りて人も
なりさまや御鬢ゝ作せりし此尼申さく
五戒十善の御果報尽さを修して
今助る御目代御覧せられ申みて
法身の行は何ゝ御身を修し
作ゝ給ゝ因果経まを説給ひ欲加過去因

見真現在果欲知未来果見真現在
因ゝ流ゝ世ゝ過去未来の因果成
業多悟らせ給ひなるつゝ御歎
有へゝ悪多太子ゝ仕九ゝて伽耶城
と沈さを給ひゝ種特山の濃ゝ木は
業成ゝ体ゝ多賞と徳しゝ鎮み上ゝく

蔭代取答ふ下ツ方ハ水と雖行者
行の切よ俗ものしれ遠ざる成業愛人
しなしさこそ中ハ法皇此尼の御
さ海と御覧するに身ハ絶命の命
已ん人ハ此代結髪て著者ハ
あれ事ハ様の変ハ不思議さ
ハ思ふ抑泄ハいふる者ハ行ふ
ハ尼さんくさ
法て暫ハ色角の海ハ小色及ず
自ものて流ハ神ハ多戸に付て憚愛
仏ハ故ハ細言入道信西ハ世の波の
内侍ハ中ハ者て俗也母ハ純体の

二位さしも御愛し深ふ思ひつるを
まのあたり御覧じ捨てし志を者に付て
色所の表へ出給ひ給へる今文
せん方なうよそ目へ（こそ）神と祈り押
當年悲歎出様目も當り侍る法望
苟も世の御願の因縁ありて有り所
流し給ひ給ひ夢と年と思
ひ出せども御涙塞敢へ給ひ給
其の人々も忘れ難の尼君と呼奉
理りまして中宮の各感じ給
中元ア
ふる御方此度殿敵
元一声ア
千種露重く籬の倒も掛りて外面の
元二声ア
元元元
元元

小田を氷敷て略たつ法もとへ合す
初
御庵室の障子を引あけ事沙汰ぜバ
一間再ひ来迎の二尊たもし西方浄土の
御手まさぐり五色九条錦条にて
初
左ハ手ハ薬師の繍像右ハ善導和尚
并ニ先帝の御形を掛ら[illegible]ハ独の

姫文九帖の御書を重ね[illegible]蘭麝の
匂ひ引かへ香の煙ぞ立ぬる波の
若君の方丈ハ室内中ハ三萬二
千の床を並へ十方の諸仏を請し
奉り金色の色あらそ[illegible]
障子ハ[illegible]諸経の要文芸色紙書

門々に押立て、裏中に大江の定基法師が清涼山にして、詠じ給ひ
笙歌遥に聞こゆ孤雲上重巒来迎落日
前芸書れ給ひ女院の御制と覚えく
て、状し引籠て思ひいるや深山の奥の
住居にして雲井の月と篠原の月をこそ
中
借僧と御寄すれ御寝所に覚しく
て竹の御竿に麻の法衣紙の御袈裟
なども高らかにさしもと本朝漢土の
物なる数ひ数へ尽し綾羅錦繡
のしるしもあらぬ夢まぼろしの成
る法皇御涙と流し給へば信西

人々もまのあたりに見奉りたる
御事なれば皆袖とぞ濡しける
有て上の山より瀧落の姿にて
尼二人岩の鉄路を伝ひ下り
行る様也あり法皇敵賢をあはれ
いうも捨ぬ御者ぞと仰ぜられ尼濡と
押へて花筵膝より外に年鶯躅抱せ
涙ぐまるる女院あり薫も
厳折奥しき御さま鳥飼の中納言
維実の女五條の大納言邦綱の養子
先帝の御乳母大納言の典侍の局
中も教ず法皇哀に思召

河流と流さを結へて結ぶの人々色又
神とそ好らさはける女流を世代いふ
河骨らは申ならケ様の沼を様と
又へ高らさを結ん事もそばかしくて
清き井やらを宮さし事も恭敬
いとと胃々毎は閼伽の水汲ぶ袖も
濡るる暁紀の神代と山路の雫も滴り
しで枝折や菊さを結ん山も沼も
結ぶ又河原宮へ入らを結ぶ
河骨を生せ結ぶ河骨の花
菜ちく花菖蒲とそ結ぶ

六道

世といふ法ひ行うせ若き侍庵室

早々御對面まつる更還御成奉らさる

後へうしろ中奥に女院法々門庵室

まぶ入せまし給る一念の窓れ前

折

拾取の光明と朝し十念の紫れ稲

まゐ重衆の来迎とて、浄つに思の
外れ御幸哉ら奥御見参成給り
法皇女院の御ひるさ酒盛浄覚すかる
悲想の八萬劫猶必滅の憂まゐふ欲界
の六天いまゐ五衆は悲と見まゐ善見
城の勝妙の樂中間禅の高殿の閣又
苦と者れ三時より六根と清うあ一遂ふ
九品れ浄刹と願ひ専ら一門の菩提祈
祈り常まゐ重衆れ来迎と朝を俗の
世まゐも高もかゐ先帝の御面影
高まゐ重ゐ先しど高りれ給ふ高まゐ重ゐ
ゐ重ゐ恐まゐ唯恵愛の道程悲

せうする女房達も皆神とぞ崇め奉る
為て女院入り給ふ御有様
る毎仏の変を一旦の歎やうに思ひ
給ひ仏の衣法生菩提の為と悦と
中ノ花ア
へし覚給へ忽ち釋迦の遺弟に列り
花ア
泰り給ひ弥陀の本願に来り給ひ五障三従
二声

女院中さ更給ふは仏の方ぶり事問
ひ給ひ仏信隆ぶ隆房ぶ郷の北の
あたり絶々中過る事なく仏菩むら
ひ給ひ人去の音まで聞へしは落涙
ぶ
ぶ給ふらさりしかとも御衣の袖被
ぶ
ぶ給ふ御涙塞敬さ更給ふ御ようさ泰ら

夢のうちに果敢なの間はたのしみ流る
流れ物無常なる車輪を廻るがごとし
天人の五衰の悲しき人間も保ひ難
世界さしかすとも行方しるか事同家
ら老ひつゝ行末は付てもなほ古へと
車を出さんとすれば作りたる

が事の変をなし彼為もして朝夕
の住まひ危きの作らりすれども
御ぶつゝ善知識こそ貴へ給ひ
ひ者給へ法華経を唱へ
我が栗散邊土也ら中世共泰と十
善は餘薫を各へ萬乗は主ら世法

国立国会図書館　タイトル『前田流節附平家物語』　請求記号 860-44
ガラス使用

一とせ心ざす叶はずと云ふ事なし中も
ひたすら仏法流布の世なれば佛道修行の
志深くして人間の
疑ひなし人間の
仏なる智ひ今更驚くべきにあらず信心の
ごとく御門を模範とし給ふ為方なう
ずして信仰と仰ぎ奉る女院宣てやうの
法ひ給ふ我身平相国の女として
天子の国母ぞ[下ヲ]しかるに天四海を
掌れ[下ヲ]ども也[ナリ]ども折[オリ]ぬ禮の春花姿より色々
の更衣佛名の年は[ハ]接禄已下の
大臣公卿まで[ニ]なりしかば[ニ]六
欲四禪の雲ぶを[ヲ]ば八萬の諸天[正入]園

遠ざらむと仰せらるるが傷ましく
仰せ者や侍ひし清涼紫震の床のと
玉の簾の内よりて饗さし春の南殿の
梅よ心と留りて日ぞ長き九夏三伏
の炎ひつつ日々衆流激て心と感ず秋の
雲れと月と猶ん事と宮と少す去
冬素雪門寒さ新ら禍と重て瞬ぶ
生不老の御代萬年花
の蕾と咲ぬと思へ
ども吹て も嘗て も栄へ給ひし事
天上の果報も尽てく迷しこそ人
新て栄永の秋の比一門の人々本望

義仲こゝかゝる心もちにて任則しゐるとば
雲井の餘所に顧て故郷を焼野の
原と泳ぎ玉ふ者哉国し須
磨より明石浦伝ひ流れ衰に覚
て三ヶ所に漫々たる海路と合て神戎
濤しく沸き渕崎の徳と共に注明す

滿々海々油を所々に
事を古へ斯申ぶ事方なりしを
五義必滅ぶ悲しき社覚ひしか人間
の事を愛別離苦怨憎會苦芸
我世に計らも侍也四苦八苦一つとして
洩れ侍ぬ備も鎮西武士緒方

三部維義とかやに九國の内とも遠
ぜさる海山野廣しと云へども立寄宿る
屋もなく河もなし口同じく秋の景色成
ふるさと昔々九重の宮殿上あて見し
月と八重九重の潮路に泳ぎ渡り
ひしに新て神も月も清澄の中

三重

打
都なる源氏の為に攻落され鎮西
とは維義が為なり遠く流され
魚の如し海に泳ぎ渡り
果てもなく哀れ悲しきに静なる
念佛して海に泳ぎ渡ひしぞ憂事の
始なる侍りも漫々たる波の上に日と

三重アアイ四ツスリ

暮れ船出して貢物も
なきもの法師と海の事もなく適供
河内海すとも云へ水なき事
す大海より浮しい潮とも飲
変もなし是又餓鬼道の苦こと
覚ひしか宝山水鳴術を戦
勝しかど一門の人々色々水し
傍ひしに摂津国一の名ある一門の
公卿殿上人大略討死宗徒の侍半
ばも亡しかど各直衣束帯を引
結び鎧武の身を纏ひ的ても
等ても軍囃の声揚る事もなきは

修羅の闘諍帝釋の諍も是なるべし
うばそくん〳〵新多一の谷も責落さし
て親ちゝに後を書ハ夫剛にして潔
白なる船とんてゝ敵の船うゝ肝潰
さゝ仕る群兵踏殺さんとゝ源氏の
旗と上るかと心ぜたゝ扇の御ようて

軍ゝ合戦ゝ湯ゝとん〳〵時二位の尼ゆ
重事ゝ申ゝ給ゝ今度のいくさゝ
男の命ハ生て帰ら事ゝ夏ゝ千萬ゲ一ワ
も有がたし（縦又生ゝ帰ハ生捕りたりゝ童後世弟子ゝ成ん）若ゝ女ハ殺さゝ也
ハ母ゝもしでなゝらゝ主上の御苦
提供弟ひ奉ゝ童ゝ後世ゝ弟子

ゝ申ゝ立ゝ給ひ候唯夢の心地して
覚侍ふ也浮雲厚ふたなびき風烈ふ
吹荒ひ無芸心と遂りに天運尽て人
の力も叶ふ事無芸人さらもり生てる
新ゝ人ゝ一時二位尼を主と抱奉り
せくるおびたゝしく舟へ心細しかぐ
あらぬ御事を悔ふ御身を捨て抑我々は何地
見しらぬ行方さらもすると我も彼も
二位の尼いかゝ君に申しまゐ
湏臾とらくしと流れ書をいまを加
古ふ仏らしびや先世に十善戒行の
御力よりて今萬乗の主はまし

さて法師はいとも面影より引まきて御運流す
べきを拾ひ給らひ給先東に向給て
伊勢太神宮に御願を奉し
まして其後西に向給て西方浄
土に為迎に願ら奉て指給奉しを
此国に栗散邊土にて心憂思給
極楽浄土にとく自身に成奉て
せ給ふ法師は法々捨給て
鶴
鳩色の御衣を着給て御
涙を流給ひ給て御
先東に向給て伊勢太神宮に
祈奉て南無阿弥陀仏

御念仏をしかハ二位の尼頭て抱き奉り
てて海に沉しかハ母ハ涙を流し心も消
果てゝ言葉をかけ慰ぶ方なく高らかに
ぶやうハ我も思ひ参らす深き淵に留まる人々の
嘆き叫ぶ声ハ大呼喚の焔
の底の罪人も見まゐらせしかハ

武士の物ものゝ中に捕はれて田舎
帰り給ひし時播磨の国明石浦
加やう著き所と打渡らるる
夢に見給ひしかハ都の内裏に還
勝りたる所に主上と始め奉り
一門の人々豊々しく氣高
る礼義して並

国立国会図書館　タイトル『前田流節附平家物語』　請求記号 860-44
ガラス使用

在りし都とも也しなきさま様の所とも
いまとなりては緒（はきもの）義経バ行ゆくえ知ずして
同じ行ひしかハ龍宮城と答しとき目
也なかりし所より抱きに巻きこめ
かし同修ひしかバ二位の尼ゞ覚しくて
竜畜（リウチク）經よんでくゝ修ふ法華ゝ弔ひ

法華ゝ中ゝ覚ゝ義覚ゝ人忍甚法を強ゝ
經續ゝ念佛しゝ主上ゝ入門著ゝ話
来ゝ修ふゝ光陰ハ月日遣り来ることも
覚ゝ修ひゝかゝ中ゝ修ゝ法華修ゝ
為ゝ異国の玄奘（ゲンジヤウ）三藏ゝ恨の前
ハいかゝと見我朝ハ日藏上人ゝ藏

国立国会図書館　タイトル『前田流節附平家物語』　請求記号 860-44
ガラス使用

王權現の御力ふ給へ六道をぬけ
こゝ我〻兼〻[illegible]御覽ぜ
第五夏こゝ我〻宮ゐ[illegible]へ御
淵と流ぜ給へ[illegible]ぬ人を皆
神どもゝ滿[illegible]女[illegible]流も御淵と流
さぜ給へ[illegible]第七番[illegible]
天神[illegible]

御往生

中 去程に寂光院の鐘は聲、今日も暮
れ行く夕陽西に傾けば御寺の
鐘も響くなり。しほたれ給へる
御涙を袖に押へ還御
なりぬ。後白河法皇
女院を慰め奉り給ふ

七さを泊しまし給ふ忍び給ふ御涙を
袖のたもとにみたせる教へを結び給ひ御法を
遥に御覧し遥て還御ましまし延さを
涉り給ふ仏の御前へ参さを結て天子聖
霊一門亡魂成等正覚
二出離生死ト云ふ
祈り申さを御屋形前々先東に向りを

結ぶ天照太神正八幡宮と伏拝を
流て天子寶算千秋萬歳と祈
ぶを結ひしが今を引替て西に向を
結く過去聖灵必一仏土にと祈を
結ふこそ悲しけれ四華長十ケ
歌とぞ詠さしける上歌此世の習ひ

七さを泊しまし給ふ忍び給ふ御涙を
袖のもうらみぞ敷さを絞りす御法を
遥に御覧し遥て還御ま御延さを
移へ給ふ佛の御前へ高さを絞て天子聖
霊一門亡魂成
願諸菩提と
祈り申さを御屋形前々先東に向りを

絞り奉天照太神正八幡宮と伏あを
流て天子寶筆千秋萬歳ことを祈
ぶさを絞ひしが今さを引替面小向を
絞く過去聖灵必一佛土にと祈を
絞ふこそ悲ましけれ
歌とぞ遊さ給ふ此さを御覧ぜ

我心大官人の意しかるらん　古一も
前に成ましき事なれば紫の編戸に
久しかりしを後徳大寺の大将
實定公も御葉の御法に惜らるる
事なれば御庵室の柱に書付られし事
さかや　古き月よ嘲しく思ひ出
光なき深山の色に光方行末の
姫宮はらかるし玉芝居思ひ出
流と流れ結ぶ山郭公の二聲
三声音信て通り事しば女院　歌
涙ならぬ色まで濡る我も憂世に音を
ぞなく　口　扨道の浦に生捕にせられ迫

二十余人の人々ひとくびべつか
大路と法さたに成ぬ書ふに別まて遠
流せらるさたに四十二人の女房達の所
変ぬ仏法法すもの親類ぬ
所縁ぬ付てぬ
おもひ〇ぬ歎
盡せ〇ぬ

ものさたもの上ものむの簾の中ものも風
静なる家もなく下ハ柴ぬ
ものも塵法もる所ものし花と雙べ
妹背ものぬ雲井の篠所る別ぬ長ぬ立
親子ものぬ行ぬ別ぬ成ぬ道
相図上ハ一人ものも恐ぬ

とも顧すに死罪流刑解官停官
八行もしが鈍く所なり白さしば父祖の
若き為に子孫より子孫に立変を疑ひ
なしこそ我が異腹の男なる斯て女院を
宮う年月代遠らを法ひ為に成
時例なる忠心比比来りしを折所を

法ひしが日来より思ひ設法華経
なしば仏の御弟五色の糸を引かさ
七結ぶ南方西方極楽世界の教主弥
陀如来本願ひやまを発す浄土へ
身法ひ中を結て其色皆て人を
法ひしかと大細言に異の局阿波の

国立国会図書館　タイトル『前田流節附平家物語』　請求記号 860-44
ガラス使用

四位侍従なる人ありけるが、今代限りの
所作なれば、様々の音を、ときどきの喚呼ひ
給ひ、三重合奏の御音、御簾の内に響き、紫雲たなびき、異香室に満て
音楽、宮人少き事、張あるべきなれば、
建久二年二月八日、中旬の一朝、遊び
終らせ給ひ、后の宮、御所へ帰り
給ふ時、御車、二声、ひきたがへ、
御車なしに、別路の御所へも遣方なく
なりぬ。此女房達、昔、
草枕、ながらへ、岩根の苔、
身を埋む。折々の御佛事、いとなみ給ふ

国立国会図書館　タイトル『前田流節附平家物語』　請求記号 860-44
ガラス使用

860
44

四九ト才

で、哀れなるべき人々も、浮きて彼龍女
が正覚は踊と遊び、章提希夫人の
ごとくに皆往生の素懐を遂げる
ものなり。

国立国会図書館　タイトル『前田流節附平家物語』　請求記号 860-44
ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『前田流節附平家物語』 請求記号 860-44

ガラス使用